

勇名謡

ブオーン、ブオーン。ザブザブ。ブオーン、ブオーン。ブオーン。ザブザブ。

それは、どこかの冷たい海でのことでした。大勢の人間たちが鯨の群れを追い立てて、次々に殺していきます。海は真っ赤に染まり、まるで紅蓮地獄です。

その中から、海流に乗って鯨の母子が逃げ出していきます。恐ろしい人間たちが追いかけて来ないように、寒いほうへ、寒いほうへ……。

北の果ての老名村^{おいな}では、大漁を感謝してお祭りが行われていました。男衆は楽器を鳴らし山車を引き、女子供は踊ります。村人は皆大いに楽しんでいました。ピーヒヤラ、ピーヒヤラ。ドンドコ、ドンドコ。

そうして用意されたお酒が底を突いた頃、村一番の漁師の男が言いました。

「俺は今までどんな大きな魚でも一人で捕まえてきた。この村の誰よりも大きく、誰よりも多くだ。だが、まだ捕まえていないものがある。鯨だ！俺は、一人で鯨を捕まえてみせる。」

男の宣言に、村人は沸きました。皆が尊敬する村一番の漁師が、たった一人であの大海獣を捕まえてみせるというのですから！今まで老名村の漁師が鯨を捕まえたことは少ししかありません。それも、何十人もが力を合わせてやっとのことですから本当なら、一人で鯨を捕まえるなどできるはずもありません。しかし、村人は男を信じました。男はそれほどまでに素晴らしい漁師だったのです。

それから一週間後、村から少し離れた海岸に小さな小屋が建ちました。鯨を捕まえるには、海辺で暮らしたほうが便利だと思っただからです。荷物を調べると、男は村を発ちました。一人で歩き出すと、向かい風から海の薫りがします。

この海に来てから、もう何ヶ月経つでしょうか。母鯨は、自分の子供と暮らしています。初めは身を切られるように感じた水の冷たさも、今では気になりません。悪者のいない海で、子鯨は元気に遊んでいます。バチャバチャ、スイスイ。バチャバチャ、スイスイ。

それは、とても幸せな時間でした。

男が海辺に来てから、三日が経ちました。まだ、鯨は現れません。男は自分が食べるだけの魚を捕って過ごしていました。それでも、鯨が現れた時のために、いつでも縄や銚、小刀はピカピカにしてありました。

朝が来ると、男は魚を焼きます。そうして立ち上る煙を追ってゆくと、村のほうに炊事の煙が見えてなんだか安心するのです。男の煙と村の煙とが、どこか空の高いところで混ざり合って、男と村とを繋いでくれるような気がするのです。

朝食が済むと、男は浜辺を見て回ります。もちろん鯨を探すためですが、流れ着いたものの中から、生活に使えそうなものを拾うこともありました。よく拾うのは流木と、知らない文字が書かれた容器でした。流木は薪にして、容器はそのまま使います。男は今日も、いくらかの流木を持って帰りました。

今日も、鯨は現れませんでした。

海辺の小屋からは、銚や小刀を研ぐ音が夜遅くまで聴こえていました。ザアー、ザアー。シャアー、シャアー……。

母鯨は、何度も夢を見ます。真っ赤に染まった海で、婆鯨が言うのです。

「フンペ、フンペ、お逃げなさい。くーちゃん連れて、お逃げなさい。ずーつと遠くへ、お逃げなさい。もつと遠くへ、お逃げなさい。」

母鯨のフンペはこの夢を見るたびにハッと目を覚まして、子鯨のくーちゃんにそつと寄り添うのでした。

そして、今は亡き仲間たちを想って泣くのです。

次の日、男は遂に鯨を見付けました。小屋から少し歩いたところで、楽しそうに遊ぶ鯨の母子を見付けたのです。男はさっそく木でできた小舟を出しました。ザアア、ザアア。チャプチャプ、チャプチャプ。波をかきわけて、男の小舟はゆつくりと進んでいきます。鯨の母子は、まだ男に気付きません。男は銚子手に持ち、近付いていきます。すうーつと、すうーつと。

するといきなり、子鯨が飛び跳ねました。大きな波が立ち、男の小舟は木の葉のようにぐらぐらと揺れます。男は驚いて「わっ。」と叫んでしまいました。その声に気付いた母鯨が、男のほうを見ます。そして、そこにいるのが男一人だということを知ると、母鯨はその大きな尾ひれで小舟をはじき飛ばしてしまいました。男は、海に投げ出されて、それから意識を失いました。

母鯨の記憶によれば、人間とは大勢で押し掛け、絶対的な暴力で自分たちを傷付けるものでした。ですから、初めてあの男と出会った時は、とても困惑しました。

男はたった一人で自分たちに向かってきました。その手に握られていた銚子から、きっと男は自分たちを傷付けようとしているのだと分かります。だから男をはじき飛ばした後も、ずっと他の人間が来ることを警戒していました。けれども、他の人間がやって来ることは決してありませんでした。

浜辺に流れ着いた男は、重たい体を引きずって小屋に帰りました。鯨にはじき飛ばされた時に、小舟も銚も縄も、全てをなくしてしまいました。それでも男は、諦めませんでした。

男は小屋に帰ると、置いてあった縄に銚や小刀を括りつけ、または縄をいくつもより合わせて、もっと頑丈な道具を作りました。今度こそ、鯨を捕れるように、と。

男は舟も造りません。あの小舟では、鯨には到底敵いません。近くの林から木を切り出して、少し大きな舟を造ります。キイコ、キイコ。男の小屋からは、ずっと木を削る音が聴こえていました。

そうして、男は何度も何度も鯨の母子に挑みました。何度もはじき飛ばされて、何度も道具を用意して、挑み続けました。

ある夜、男は、そして母鯨は不思議な夢を見ました。

男は座っていました。お尻の下には、ゴムの長靴のようなつやつやしたものがあります。それを不思議に思った男が辺りを見回すと、そこにはただただ海が広がっているだけでした。

男は座っているうちに、そこが微かに揺れているのに気付きました。まるで波に浮かぶ小舟のように、ゆらりゆらりと。そして男は気付きました。男は母鯨の耳と耳との間、つまり頭の真ん中に座っていました。それが何を意味することなのか、男にも、母鯨にも分かりません。

それは、不思議な夢でした。

翌朝、男はまた舟を出しました。なんとなく、鯨との決着が付けられるような、そんな気がしたのです。

鯨の母子もまた、男を待っていました。何度もぶつかるところに、人間の男に少しだけ、気を許せるようになっていました。

あの男は、今まで出会った人間とは違う。そう思ったのです。

そして、男と母鯨の戦いが始まりました。

海は大荒れ、波しぶき。銚を投げれば血しぶきが、尾ひれ打ち付け舟は揺れ、周囲が赤く染まります。三日三晩の戦いで、両者共々疲れ果て、遂に鯨が倒れます。

男はとうとう、一人で鯨を捕まえることができました。

母鯨と男が戦っている間、子鯨はずっと遠くにいました。母鯨から、近くに來ないようにきつく言われていたからです。だから子鯨は、遠ざかる母鯨と男を、浜の近くから眺めていました。

やがて、母鯨たちが見えなくなった頃、子鯨はとても怖くなりました。何か恐ろしいものが近付いているような、そんな不気味な感覚がします。子鯨はそれから逃げ出すように、急いで浜から離れて、母鯨たちが消えたほうへ向かいました。

赤い海で、男は迷っていました。鯨との戦いに夢中で、沖のほうまで流されてしまったのです。見渡しても、陸は見えませんが。血に染まった海は夕焼けと混ざり、一層赤くなっていました。

一晩が過ぎました。夜明けの遠い空に、一筋の煙が見えます。きっと村の煙です。朝ご飯の仕度をしているのでしよう。男は、その煙を頼りに進んでいきました。三日三晩、何も飲まず食わず、そして眠らず過ごした男はもうボロボロでしたが、それでも鯨を曳いて進んでいきます。

ずっと漕ぎ続けて、やっと陸に辿り着きました。煙はやはり村からでした。男は喜び勇んで舟から飛び降りると、そのまま村へと駆けていきました。

子鯨は赤い海に辿り着きました。しかし、母鯨の姿はありません。子鯨は泣きました。母鯨がもうどこにもいないことに気付いたからです。子鯨は泣き続けました。誰もいない海で、泣き続けました。

やがて、涙で海が青くなった頃、子鯨は一人でその海から旅立ちました。

この海には痛みしか残っていないと、そう気付いて。

子鯨は去っていきます。

寒いほうへ…。

もっと、寒いほうへ……。

もっと、もっと、寒いほうへ……。

そこには、焼け落ちた家々や、地面に転がる沢山の村人がありました。村に駆け込んだ男は、それらを、見付けました。

無残な村を彷徨いながら、気の良い村人たちの笑顔が思い出されます。けれども、もう、誰も生きていないのです。村人は皆、殺されてしまったのです。

男は、村の端っこで見慣れないものを見付けました。それは木の実のような形をした容器でした。そしてそこには、浜辺の容器と同じ文字が書かれていたのです。男は理解しました。海の向こうから来た人間が、この村を滅ぼしたのだと。

男は泣きました。泣き続けました。噛み締めた唇から血が流れます。そして、疲れ果てた体で再び夜を迎えました。

そして日が昇ると、男は、眠るように息絶えました。

「だから、お前たちよ。決してあの海に行つてはいけないよ。」
大きくなつたくーちゃんは、子供たちに語ります。